一年目

二月

果報は寝て待て。というけれど、あんまり寝てるからチャンスの方がしびれを切らして起こしに来たような、そんな感じでこの仕事がやってきた。スポーツ用品メーカーMの女子寮の寮母。寮生は現在十八歳から二十五歳までの二十人。近くに第一寮があり私のところは第二寮。

仕事は夕食とお風呂の仕度、門、玄関のあけしめ（これがかなり煩雑）、掃除など。食事は全員というのはなく、半数の時もあり、メニューは給食屋が決め、材料を前日に持ってくる。それを調理するだけ。当然むつかしいのはなし。でも数の多いのは二人分より作りがいがあるし、魚料理で希望者が少ないとがっかりし、よーしそのうちなんとかして食べさせようと思ったりして、交野にいた人とここにいる人が同じ人とは思えない。しかし要領よく仕事を終えれば自由にできる時間はたっぷりあり、大きな顔して読んだり書いたりできるので、これでお金をもらうのは抵抗を感じるくらい

のものである。

○日　寮会

正式に顔合わせ。いっちょう演説をぶってやろうと思っていたけれど、しょっぱな、私は五十歳でみんなのお母さんくらいだから大阪のお母さんと思ってと言いたかったのに、五十歳と言ったところでどよめいて中断。息子しかいないけれど自分自身が娘であった経験があるから何でも相談してと言おうと思ったのに、息子と言っただけで、紹介してほしいと声がかかり、ルールを守れ、まず門限を守れ、ボーイフレンドとデートの時は必ず送ってもらえ、女を大事にしない男はだめ、これから間接的に男をしつけるから友達にそう伝えよ。これらはそれぞれ嬌声やら歓声が入ってとぎれとぎれ。末が思いやられる。

○日

夕食はカレーライス。朝からねかせておいた私のカレーは好評で、「ひとくち食べさせてもらったけどおいしかった、欠食せんといたらよかった」という子もいて、してやったりとほくそ笑んだ。

夜十時すぎ男侵入。ここは女の城だから時々ヘンなのが来ると聞いていたけれど、何も着任早々来なくてもいいのに。しかしこの男、酔って近所の家に侵入したため警察に追われて逃げこんで来たらしい。偶然私が見つけ、出てくださいと言ったら戻りかけたが、空家の旧館があるし庭も広いので見失ったら大変と思い、迎えに行く形となってしまった。刃物なんか持ってたら危ないなとは思ったけれど、ここで私がしっかりしなくては、と果敢？に立ち向かった。幸い無事に門の外へ押し出したら、ちょうど警官が通りかかり、「お知り合いですか」「いいえ知りません、勝手に入りこんだんです」その間に男は逃げ、オートバイに追われてつかまえられたが、おかげで名前をきかれ年をきかれ、こちらは大災難。

夜池田署からも電話がかかり、また状況をきかれた。しかしそのあとがへんな具合。「住居侵入だと思いますか」「侵入したから侵入でしょう」「訴えますか、説諭にとどめますか」なんで私が罪と罰を決めんならんのよ。「私としては、はじめはとにかく出てくれればよい、と思いましたけど、私も若い女の子を預かっている責任がありますから無条件で許すというわけにはいきません」「そうですね、では厳重に叱りおくということでどうでしょうか」こんなのが民主的というのか、いやになるよ全く。

それにしても叱りおくだけでいいのか、あれはきっと酔っていたからだ、日本では

酔っていればかなりのことでも許されるんだから。

その日はあいにく一寮からお風呂に入りに来ている子があって鍵をかけていなかったのだ。帰る子を電灯とゴルフクラブを持って送って行ったら「帰り気をつけてね」その子が言ってくれた。

○日

会社へ昨夜のことを報告。「何事もなくてよかったけれど、そういう時は寮母さんも中から鍵をかけて警察を呼んでください」と叱られてしまった。とにかく外に出さなければ、というのが頭にあって、ケイサツなんてとんと思い浮かばなかった。どうも、私が、というのはいかんらしい。

○日

ようやく少し余裕が出てきたので大掃除開始。布巾、雑巾を白くし、塩の入れ物をお湯につけて寝たら、翌日もまだお湯につかっている。アレと思ってよく考えたけれど、いつまでもお湯であるはずがない。どうやら誰かが朝、熱湯にかえておいてくれたらしい。誰か分からんけど、オヌシヤッテクレルヤンカというところ。

○日

夜、ご飯が足りるかとのぞきに行ったら山程残っている。ひとり五勺見当で炊いているのに。最後のH子にもっと食べなさいと言ったけれど、残るのは必定。

おにぎり作ろうか。H子が前はほかほかのでも捨てられた、私は作る側の人間だからもったいなかった、と言い、私だって代用食で育っているから捨てられへんよ。テレビを見ている子にも手伝わせ、梅干し、塩こぶを提供してもらって、大小形とりどりのおにぎりをきゃあきゃあ言いながら作り、あしたの朝食べようとみんなにっこりして引きあげる。

○日朝、はよ行かんとおにぎりなくなる、とH子がねぼけ顔で走りぬけた。

○日

夜、P子が、帰りが十一時をすぎると電話してきたので、いつもは点検終りましたというのを聞いてからお風呂に入るけれど、今夜はその前に入ったら、当番の子二人がお風呂場まで言いにやって来た。「見たな」と言ったら笑いながら行ってしまった。

結局P子は十一時半に帰って来た。「罰はあるよ、分かってるね」「分かってます、

お風呂洗います」でもお風呂洗いは私の体重減らしになるから譲れない。〝おばさんの肩たたき〟にしたろうか。ソレガイヤナラハヨカエレということだ。この日は、もう寝るというのを「どうせ着替えるのだし、お化粧を落とすのでしょ、お風呂残してあるから入ってお湯を抜くこと、それが罰よ」とした。

○日

寮の中を春一番が吹き抜ける。天候のせいではなくて、新入社員が入ってくるため、半数は他の寮へ替わらなければならない。一寮へ行くのはまだしも、甲子園の第三寮へ行くのはいや、とみんな言う。三人部屋で二人の先輩のところへ入らねばならないからだ。希望者がいなければ抽選で決める。どうせ当たるのなら、と三人が一寮を希望する。退寮するというのが二人あって、確率は三十三パーセントに減った。三寮へは一人、となる。抽選のための寮会はあさって午後十時半と決定。

今夜のメニューは八宝菜。豚、イカ、白菜、人参、ピーマン、玉葱、もやし、椎茸、きくらげ、メンマで十宝菜やんか。十二人では白菜は大きいの一個。それぞれを同じ大きさに切る。切るというのもなかなか楽しい作業。先日も大豆と豚、人参、筍、じゃがいも、コンニャク、平天を煮るのがあった。この時は全部サイコロ。これも夢中で

やっていた。

「ご飯が足りません」（なに？　あんたら気まぐれが揃ってるの）そういう時用に少しとってあるのを出してジャーに入れる。「残ってる人の数見て食べてね」やがて「おばさん、一人分足りません」えー今日に限ってよう食べるんやね。仕方ない、炊きましょう。九時すぎから炊く。十時、遅番で帰ったK子が最後に食べてる。「ご飯どう？」「おいしいです」「固くない？」「いいえいつもとおんなじです」ああよかった。どうも洋食でスパゲッティがついている時などはあまり食べないらしい。カレーライスの時は一人当たり七勺炊くけれど余らないし、気まぐれではなさそうである。

○日　抽選の寮会

「おばさんクジ作ってください」「えっ私が作るの？　そんなのいやよ」「毎年おばさんが作ります」「そんならアミダクジにしよう。名前を書いて、それぞれ線を加えてよ」

結局若い子ばかり五人、一年目のA子も当たった。A子は去年十人で一緒に入ったのに、一人だけ出なければならぬ。じっとうつむいていたけれどやがて泣き出した。（誰か年長の子が替わってやればいいのに。でも私からは言えない）「誰が三寮へ行

くか相談して決めますから」しばらく話し声が聞こえていた。代表のI子がやって来て「A子がかわいそうだからU子がかわります。U子は私も一緒の方がいいから。三寮へはZさんが行きます」私は年長のG子が「当たらんかってよかった」という顔でさっさと引きあげたのにこだわっていた。でも二年生がやさしく後輩を残してやったことで少しほっとして「ありがとう。つらかったわね」とねぎらった。I子は「毎年ある別れの季節」とひとこと言ってにっこり笑い、おやすみなさいと出て行った。

○日

二週間経った。どうやら体が時間を覚えたようだ。いろんなチェックタイムも、もうそろそろかと時計を見たらやはりもうそろそろなのだ。

朝、テレビを聞いていたら昔なじみの名前が聞こえた。へえテレビに出てはるの。食堂へ画像を見に行く。この間はシカゴから絵ハガキが来ていた。中国やイギリスへ行ったり、国内でも飛び回っているらしい。私の、地球上の一点にじっとしているのと好対照。でも彼がたとえ北極にいても神戸にいたとしても私からは同じ距離。

ラジオにテレビの音が入るので、それを聞いているのだけれど、これでけっこう事が足りる。ドラマのせりふが見ているのより強く聞こえ、俳優の上手下手がよく分か

る。目の部分が耳に加わるのだろうか。しかし平山郁夫のシルクロードの絵が出ていた（らしい）時は、美しい音楽が鳴っていて思わず目がそちらへいってしまった。何べん見てもラジオしか見えない。

今日は寮生の欠食が多く帰りも遅い。給料日だからだ。食堂にいた子たちも機嫌がいい。ゆうべ泣いていたA子も「わたし、替わってもらいました」とにこにこしていた。私の分は本社のB子が「初給料です。キャッシュで入っています」と給料袋を持って来てくれた。どちらが寮母か分からぬことをやっていてお給料をもらえるのだからこんなに有難いことはない。おまけにお腹がへっこんで足も細くなってきた。調子にのって朝走ろうかと思う。

M子が「お先にお風呂いただきました」と言いに来たので「ごていねいなごあいさつおそれいります」と言ってやったらキャッキャッと笑って行った。「一緒に入ったらいいのに」「いやよ衰えを確認したくない」「刺激されてシェイプアップすればいい」「それが可能な年じゃないよ」H子とこんな会話。

三　月

○日　引っ越し

六畳に二人暮らしなのにどこに入っていたのかと思わせる荷物の山。一寮へ四人が引っ越すのに小型トラックが三往復もした。

一寮へ行くことになっていたU子が病気がちのため、こちらで預かることになり、付添役としてI子も残る。

三寮へはN子とY子の二人が行くことになった。二人がさよならを言いに来たら、涙が出そうになる。一か月しか経っていないけれど、どんな状況であっても別れは悲しい。二人も淋しそうにしてるから道まで送りに出て、車の中へ投げキッスをしてやった。キャアという声が遠ざかる。

夜、U子の具合が悪くなり病院へ運ぶ。I子を残しておいてよかった。しかしU子の病気は栄養失調ではないか。食べ物を見ただけでむかつくとか、好きな物だけをチョ

コッとつつくだけと言っていた。もちろん寮の食事は食べたこともなし。
ここのおかずは上等ではないけれど、毎日目先を変えて栄養が行き渡るようになっている。I子と二人でU子に食べさせる共同作戦を開始。

○日
寮を出た子が欠食のサインをしたり、しなかったり、U子とI子の分が一寮から戻ったりして食数が合わず、きのうも今日も私の分はなし。きのうはS子にも謝って欠食にしてもらった。
実費計算表というのに書き入れたり消したり数字が合わないので四苦八苦していたら、明石の仕事の原稿を取りに来た友達が「あなた、簿記二級なんでしょ」チクショウこんなの簿記と関係ないよ。
しかし欠食を頭数で処理せず、誰が、と顔を思い浮かべたら間違うことはなかったのだ。
最年長のG子が退寮した。

○日　日曜日

テレビっ子のR子に留守番をたのんでダイエーまで行く。ほんとにシャバへ出た、という感じがする。外出できないというよりあの鉄柵の大きな門がいけないのだ。

A子が「ダイエーへ行くのなら歩いて行けますよ」と教えてくれたけれど、ほんとは電車に乗ってみたかった。もう一か月以上電車に乗っていないから。「それなら梅田まで電車乗りに行ったら」とも言ってくれたけれど、そんな時間はないのでやっぱり歩いて行った。カーテン地を買う。しかしシャバに出た、と喜んでいたが人の多さにぞっとして逃げて帰って来た。この間もらった給料の大半を使い、このあとひと月暮らせるか。

○日

メニューは煮魚。サバの、大きいまるまるしたやつ三びき、ごろんとある。出刃包丁はまだ見たことない。一寮の先輩寮母さんに電話。

「ここに出刃というのはないのですか」「ありますよ刃の欠けたのが」「えっ先がなくてどうやるのですか」「ホ・ホ・ホ、技がありますやろ」「ワザてひょっとして私の腕前のことでしょうか」「そう。技でどうぞ」笑いごとじゃないよ。もう知らん。こうなったら大名おろしだ。

しかし三びきめは上手におろせた。上手になったらおしまいか、もっとやりたい。

○日

疲れ果ててお風呂に入る元気なし。

最後らしいK子にお湯ぬいておいて、と言って寝ていたら、ドアをトントン叩く音がする。よっこらしょ。K子がいて「疲れた時はお風呂に入った方がいいと思います。まだ熱いお湯が出ます。入られても決して後悔しないと思いますよ」

折角言ってくれるのを無にできなくてつかりに行く。お湯の中で長々と寝そべっているとK子の言う通り疲れがとれる。それは分かっているんだけれど始動がきかないのだ。

静けさの中蛇口から時々落ちる水の音が、何か優しく聞こえた。

○日　新入社員入寮

七人全員高卒十八歳。

九州からブルートレインで来る子は朝早く着く。しかし午後四時までにということなのでぽつぽつと到着。家族と共に来たのは四人、三人はひとりで来る。最後の子は

大幅に遅れ、電話をかけてきて荷物があるから迎えに来てほしいと言う。

人事部の若い人がとんで行ったが、布のバッグと紙袋二つ。片手でも持てそう。このごろの若いモンはこんなものか。彼女たちを前にした人事氏の訓話も小学生に話すような口調であった。

今夜は新入生の就職を祝って全員赤飯とブリの照り焼き、こうやどうふ、筍、ふきの炊き合わせなど二十五人分は最多。一寮の寮母さんにだし巻を焼いてもらう。彼女、卵を五十個割って大ざっぱに焼き出し、二十五人前に余りもせず足りなくもなし。さすが。シャッポをぬぐ。

先日六人が出て行ったあと新入生が来るまでに休もうと思ったら次々と荷物が届くので休めず疲労困ぱい。友達にＳＯＳを発し、弁当の差し入れをたのんだらコーヒーに果物、ビタミン剤まで入っていた。

新入生を部屋に案内した。鍵を渡し、自分で開けさせる。同室の先輩からの手紙が机の上にあり「やったァ」と大喜び。

夜はそれぞれ先輩がケーキの箱をさげて帰り、これからペアで生活する後輩の歓迎会をするとのこと。

○日　新入社員入社式

玄関に紺色スーツの集団がいた。「誰か待ってるの、ああ先輩に連れてもらうのね。先輩はまだ……」と言いかけて横切ろうとしたら中にT子がいた。「あ、ごめん。見えなかったのよ」T子はプウとふくれている。しかしT子はきのうまで幼い顔していかにも末っ子という感じだったのに今朝はどうだろう、たしかにお姉さん、という顔になっていた。これは不思議といえるほどのことであった。

新ちゃん（前からいる寮生は新人をこう呼ぶ）は何をするにも七人一緒。帰りが遅いので心配していたらそれぞれ手に買い物袋をさげて帰って来た。市場やスーパーで買い物をしてきたらしい。もちろんレジで並ばねばならないけれど、みんな終るのを待って、そろって次の所へ行き、同じことをして、とやるものだから時間がかかるのだ。

寮の中でも集団で移動している。

○日

しばらく新入生のために朝食も作ることになる。ご飯を前の晩と一緒に炊いて、朝の三十分をさぼろうと思ったのに朝の分は残らない。結局炊き直し。分かりましたよ。こそくなかせぎはやめにします。

避難はしご点検日。袋の中にハシゴがついている。「寮母さん降りてください」「えーっ私？　スカートはいてるから」「スカートでも降りなくては」「そうですね」休みの子三人をたたき起こして参加させたが、やっぱり先頭は私らしい。観念して三階の窓から庭へ降りた。

下から見ると大きなイモムシがくねくねしているみたいで大笑いする。しかし、イザという時揺れるハシゴを確実に踏めるかなという心配が残った。一度全員にやってもらわなければならない。

○日

休みのK子が買い物に出るというので手紙をことづけ、おみやげねーとふざけて送り出したらたこ焼きを買ってきてくれた。「冗談だったのに」と言えば「私も冗談のつもりで買いました」いくらふざけながらでも、聞けば買わずにはおられないだろう。悪いことをした。

K子は行ってきます、ただいま、掃除機借ります、お風呂お先にいただきました、おかずおいしいでした、ごちそうさまでしたと挨拶をよくする。当たり前でよくとは言えないかも知れないけれど他に何もしないのが多いから目立つのだ。

もう全く口を開くのはやめにしてると思われる子がいる。私がおはようと言っても横を向いたまま、おはようと言ってるのかどうか分からない。その子が畳替えの時にやって来て、どの畳を替えるのか図で示してほしいと言った。ステレオがあるからとのことであった。

新入生の集団は二人、三人と分かれはじめた。細胞分裂を見るようでおもしろい。でも何か伝えたい時、一人に言えば、すぐに、確実に伝わる。

○日　日曜日

従妹がのぞきに来た。何かほしい物あるかというので砂糖入れとスプーンをねだっておいたから持って来てくれた。他に叔母からお寿司、チョコレート、ういろうなどの差し入れ。叔父から写真と沈丁花の花束。久しぶりにしゃべりまくる。しかし時々〝おばさん〟に変身しなければならない。

今日は野菜いため。従妹がおもしろそうだからやりたいと言う。エプロン貸して、私はカントク。食堂にいたK子が「妹さんですか」あれ、似てる？　でも似てるなんて言われると両方で気が悪いヨ「実は従妹」「お世話になっております」「こちらこそ」従妹も、切るの楽しいねえとザクザクとやっている。

R子が入って来た。「妹なのよ」「従妹さんでしょ。聞きました」
この前のお風呂をのぞかれた時、後日H子に「Eさんに裸見られたよ」と言えば「知ってる」。あんたら放送局持ってるのか。

○日
E子が突然怒鳴りこんで来た。「どうして新ちゃんにお茶碗買わせたんですか。かごは別にしてください」なんのことかさっぱり判らない。どうしたのか、あんた瞬間湯沸かし器？「え？　お茶碗は自分用のを買うのと違うの？」E子は「あんなことしてもらっては困ります」とばかり興奮して言っている。とにかく食堂へ行く。
かごに伏せて置いてあるお茶碗は、会社が買っているものだったのだ。それを私がめいめいで買うのだと思いこんで新入生に買っていらっしゃいと言ったからみんな好きなのを買ってきたわけだ。
しかし待てよ。新入生が来た日、本社のK氏がお箸とお湯呑みとご飯茶碗は自分で買いなさいと言ったではないか。私といえどそうそう勝手にことを決めるわけではないのヨ。
でもこうなれば仕方ない。新しいお茶碗は新入生に引っこめてもらう、という解決

法をとる。E子はまだ怒っていたけれど、私はお茶碗を引きあげ新入生に謝りに行った。「ムダづかいさせてごめんね」

○日

時々来られる本社のK氏は前は人事部で私の面接をした人だ。異動で寮を管轄する総務部へ変られた。だから一番よく声を聞き、顔を見る。この前自転車を息子に届けてもらおうと思ってると話したら、会社のを持って来る、と言われたので放送局に知らせたのになかなか届かない。しびれを切らして催促したら、その夜ワゴンに積んで持って来て下さった。一緒に私の誕生祝い（会社からの）と海苔、鰹、若布の詰め合わせを下さる。おにぎりに鰹を入れ、たっぷりと海苔が巻けてみんなも喜ぶだろう。

ご飯は相変らずたくさん余る時と足りない時といろいろ。おにぎりを作ったら、朝までもたず、その夜のうちになくなってしまうこともある。

○日

遅番の子が帰って「おばさん、私のおかずありません」あれまたか。この前足らんかって欠食にしてもらったS子。私はもう食べてしまったし。前科があるのでおそる

おそる確かめる。しかし間違っていなかった。大きな顔してマイクで呼びかける。「どなたか欠食にしたのに食べた人いませんか」

すぐにバタバタッとかけ下りて走りぬけ食堂へ飛びこんだのがいた。私もついて入る（食堂にサインした紙がはってある）。「ごめんなさい。やっぱり私やった。食べていいのかなと思いながら食べた」とT子。S子は「私も悪い予感がしてた」今日は豚の生姜焼き。おいしかったのだ。T子は「すみません」と小さくなっている。「どうしてくれるのよ」とS子は笑いながら言い、私に「よくあるんです、慣れてます」「この間は私が一枚加わったしね」

「私はSさんとTさんの欠食を入れかえておくから、後の精神的なものはお二人でどうぞ」T子はS子に「何でもしますから」ととりすがり、S子は黙ってインスタントうどんを取り出している。

「ほら、早くお湯を入れてあげなさい」「ハイッ」

○日

目の下がけいれんし、なんかいらいらするので外へ出る。自転車初乗り。ついでに付近を探検する。住宅街の中には商店は全くなし。ポストもない。買い物はやっぱり

石橋か池田まで行かねばならない。石橋まで行ってノーシンと暮しの手帖を買って帰る。

ようやく本を買える身分になった。音楽会の切符も買えそうだけれど、夜出られなければ聴きに行けない。暇もお金もある、か暇もお金もない、かのどちらかだと思っていたけれどお金はあるけれど行かれない、というパターンもあるのねえ、知らんかった。

四　月

○日

なんか静かすぎる。寮生が帰ったら名前を書いて時間を書き入れるノートを見に行くと静かなはず、半数が帰っていない。

九時過ぎにA子から電話がかかってきた。「梅田でみんな一緒に仲良くやっています。遅くなるけど責任持って連れて帰るから」「みんなって誰よ、名前を言って」「B、T、K、N……」「わあおぼえられへんよ」「遅くなる人みんなです」とにかくその時点で九人が帰っていなかった。門限は十時。

十時十五分、I子が帰る。「私が最後でしょうか」「あなた一人？　じゃ八人まだ帰ってないよ」「へえっ」

十時四十五分、待ちかねたチャイム。門を開けに行く。「ただいまァ」「ただいまァ」「まあまあようこそお帰りで」「すみませーん」「みんなで帰ればおばさんもこわくな

い、というところね」「新人の歓迎会をしてたんです」（まあいいことやってたんね）「ところで私におみやげぐらいあるんでしょうね」「いやおみやげ話でいかがでしょうか」「もういいわ、早くお風呂に入りなさい」「入っていいんですか」「いいですよ。私だって折角焚いたのに半分しか入らへんのは残念よ」十時半からは入られないことになっているが、長湯っ子がいて十一時を過ぎる時もあるから同じことだ。ドタドタ、ガヤガヤ、バタンバタン、夜更けてようやくいつもの二寮らしくなった。

○日

ゆうべの集団門限破りにつきあって、今朝は店卸しがあるからというS子につきあって、私は睡眠不足。でも昔の午前様と朝の弁当作りにいつ寝たのかいつ起きたのか分からない生活よりはまし、と思うことにする。それに昼寝ができるのだ。こたつに足を突っこんで寝るのに毛布は大きすぎるのでベビー毛布を買おう、と思ったけれど、もう外出用のコートはいらないのだし、ためこんである布の中から気に入ったウール地をそれ用におろす。これまでも夏服用の布はいくつかエプロンに化けた。もう少し増やしてウィークリーエプロンといこう。

○日

I子がおばさんのおかずは並べ方がいいから食欲が出ると言ってくれた。それに「料理によってお皿の変るのがいい」「そんなことならお易いご用よ。でもお皿が陶器ならいいのにね」（ここのはプラスチック）「割れるからでしょ」「あらお皿は割れるものよ。割れなくちゃ」そのあと、私はコーヒーカップを割ってしまった。これは大倉の上等だったのに。あんなこと言わなけりゃよかったかな。生あるものは必ず滅す、形あるものは必ず砕く。なんだけど。

ガス代を心配しなくていいから気を大きくして料理ができる。例えばカレーやシチューの時、玉葱をトロトロになるまでいためてベースを作れるし、サラダの時、じゃがいもを丸ごと茹でて、冷えてから皮をむき刻む、この方が形がこわれず味もよいから。

幕の内風とか炊き合わせとか名前が違っても中味はほとんど同じ。だし巻が続くので今日は明日の材料から人参、葱を少しまわして掻き玉にした（実を言うとだし巻は不得手）。その代わり、というわけでもないけれど野菜をいためて卵でとじるとあるのを一人前ずつオムレツにしたりする。

ここにはすごいフライパンがあって（すごいというのは使いこんだ、という意味）、

目玉焼きなら六個焼けるくらいの大きいのと、オムレツ一人前用の小さいのが特によくて気持ちよく使える。ただし、大きい方は重くて片手では持てない。オムレツを二十人前でも焼きたくなるのはこのフライパンのせいかも知れない。とにかく私はオムレツ、サラダとなるとうれしくなって味を変えたりして楽しんでいる。私はエンジンのかかりは遅いけれど、やり出せば好きな方らしくて、気がついたら四時間も台所でコトコトやっていたという時があった。

○日

門限破りが続く。ノートを調べたら、私になってから断然多い。ナメテルノトチャウカ。私も怒ったらこわいのよ。きのうまず黒板に門限は十時。十一時には部屋に帰ること。十時半以後の電話は取りつがないと書いておいた。今日は仕事で遅くなった一人を除きみんな門限内。素直やねえ。みんなおりこうさん。

○日

昨夜遅くものすごいブザーの音。すわ火災か、ととんで行ったら受水槽減水というところに赤いランプがついていた。どうすればいいのかこれは聞いてなかった。とに

かく音を消し、長電話している子から電話をとりあげて一寮へＳＯＳ。でもあちらも長電話か、どれも通じない。自転車で走り、寮母さんに来てもらったが彼女にも分からない由。あしたのことにしましょうと寝たら今朝はランプが消えていた。一応会社へ電話したら「バルブの具合がいっとき悪かったのでしょう、そのまま様子をみてください」とのこと。このバルブめ、時々猛烈な金属音を出すのだ。この前は「やかましいね」と言って叩いてやったらピタッと止んだ。

人が言うように三か月から六か月が第一の危機らしいから、これは私に対する警報だったのかも知れない。

五　月

○日

寮母になって九十日。二回目の休み。初めて電車に乗り外出する。友達のある受賞を祝う、コーラスOBのパーティに出席、他のお友達二十三人にも会う。始まる前に世話をしたO氏に「あの人のパーティやからこれだけ集まったけど、私のやったら集まらへんやろね」と冗談を言ってたら、O氏は挨拶のあとで「ミヤさんが出版記念パーティをやるそうですが、ひがんでたからその時は行ってやってください。会場はロイヤルホテルです」私はとび上がったが、みんな昔から冗談や駄洒落の好きな連中で「なに？　出版記念？　シュッポン（出奔）記念やったらすぐやれるでぇ」「必ず出席するからサイン入りの本ちょうだい」しかし、老クリスチャンに「そういう仕事もやっておられるのですか」とまじめな顔で聞かれて困ってしまった。でもみんな、冗談にのったふりして私を励ましてくれたのだと思う。一緒に歌い、三十年付き合ってきた

人達だから。

○日

朝、緑地公園へ遠足に行く、とかわいらしくおにぎりを作っていたS子が、門限をかなり過ぎて酔って帰る。私が出て行くとO子がさっと隠すようにS子を抱えて連れて行った。O子は私に叱られることからかばってやろうというつもりらしかったが、S子は階段を上がりながら「おばさーん、すみませーん」と大声でわめき、折角の思いやりも水の泡。しかし私はあの酔っぱらい特有の臭さに昔を思い出してたじろぎ、言葉も出ず見送ってしまった。

しばらくして我に返り、裏切られたような腹立たしさはあるけれど、まだ免疫もできていない若い子があんな酔い方をして急性アルコール中毒になってもいかん、と見に行った。同室のN子はもとよりみんな親切に新聞紙を敷いたり洗面器を置いたり介抱してやっている。K子がトイレ掃除をしていたらしいので「汚したの」と聞くと「いいえ、違いますっ」

S子よ。お前さんはGパンはいたままころがっているけれど、寮友たちのこのかばい方はどう、よく見なさい。

○日

もう一か月近く放送機が故障しているが修繕に来てくれない。電話の取り次ぎや、お風呂どうぞ、というのを三階まで言いに上がっている。「親切で足の運動させてくれはるのでしょ」とイヤミを言いながら走っていたが、今日電気部の人が来て、一分もしないうちに「マイクのテスト中」という声が寮内に響き渡った。「あれ、もう直ったのですか」「マイクの差しこみがゆるかっただけです、ままあることです」と軽蔑の眼差し。ナンチュウコッチャ。かなり機械や電気には強いはずの私なのに、門のチャイムが気まぐれのように鳴ったり鳴らなかったり、原因不明の警報が鳴るし、またか、と思ってよく見なかったのが失敗であった。三階までのかけ上がりは自業自得のようなもので、イヤミを言う資格はなかったのだ。と素直に反省している私に電気技師は追い討ちをかけた。受水槽の警報について「ブザーが鳴った時、受水槽の蓋をあけてのぞいて見てください、中へ入ってはいけませんよ、水が入っていますから」差しこみも分からぬおばはんにはこれくらい言わないと見に入って溺れ死ぬと思ったか。しかし大丈夫よ、その蓋というのが鉄製でビクともしない。したがって溺れる心配ありませーん。

○日

連日電器店からテレビが届く。新入生の一人が買えば（親に買ってもらえば）次々と伝染した。テレビがなけりゃステレオや大きなラジカセがあるし、ないのは寮母室だけだ。それに日曜日、テレビっ子でにぎわった食堂もシンとしていて、留守番をたのんで抜け出すというのもできにくくなってしまったではないか。誰か下りて来てよ。前のように食堂でわいわい騒いでよ。

六　月

○日　洋裁教室始まる

廊下にあったミシンが、寮のもので、こわれているから使えない、と聞いたのはつい最近のこと。調べると、大したこわれ方ではなく、私の手で足りて縫えるようになった。「空室を裁縫室とするから使って。よければ洋裁教室を開く」と黒板に書いたら「ベリーグッド」と書いた子があり、教えて、と言ってくる子がいた。

教室といっても、めいめいが縫いたいものを縫い、アドバイスをする、ということにする。

U子がウエストにゴムの入った吊りスカートを縫う、と布を買ってきた。「あなたがトップとはねえ、お天気変らないかしら」などと言いながら裁断をし、まち針を打って「ここ縫っていらっしゃい」「ここをまつるの」これじゃ半分は私がしてしまうことになるのだけれど、二晩で完成した。「みんなに見せてこよう」みんなに「可愛い」

と言ってもらってU子はご機嫌。「会社でも自慢してやるんだ」と出勤して行った。
家政科だったというS子とJ子は「血がさわぐ」と言い、今まで何も縫ったことがないというN子も「布をいくら買えばいいのですか」と聞きに来て、やっぱり女の子だなあと思う。やり出せば、きっとみんな縫う喜びを知るだろう。

○日

みんなで草取りをすることになった。ノルマは一人一時間。都合のよい日を予告して、と言ったがすぐやろうという子はいない。やがてN子が○日にすると言った。N子は何をするのも一番あとで、ゆうゆうと見えるのんびり屋さんなんだけれど。
そしてその一番手がノルマを終えた日、本社から常務さんが旧館を視察に来て、草ぼうぼうの庭も見て「草刈りの人をよこします」と帰られた。私は今までの例で、即実行されるとは思わなかったけれど、すぐ業者が下見に来て明日から始めますということになった。
黒板にぼちぼちと予定の日が書かれつつあったのを消し「草取りは業者が来ることになりました。Nさんには申しわけないのですけれど」と書いておいた。
夜みんなが帰り、歓声をあげ、N子に対して同情の声。私も「こういうことになっ

ちゃってごめん」と言ったがN子はニコニコしていた。しかし黒板の申しわけないの横に「ホント！」と書き入れがあり、N子が書いた由。

草取りは結局屈強の若者五人で二日かかった。それはもう徹底的で、我々とはやり方が違うけれど、それと取り組もうとしていたのは無理ではなかったか、と思う。常務さんのお出ましはラッキーだった。

○日

今日のメニューはロールキャベツ、マカロニサラダ、漬け物。ロールキャベツにトマトケチャップがついてサラダに西洋人参が入り、大根のさくら漬け。レッドとオレンジとピンク。こんなの許せない。私の美学（？）に反するのだ。たいていは仕切り皿を使うのだが、お皿を替え、ケチャップをめいめいでかけるようにし、漬け物は別の小皿に入れる。オーバーに、何事ももう辛抱しないというモットーに従った。

○日

夜、熟睡できず、神経が少々異常である。拘禁性ノイローゼだと素人判断する。もう一か月以上休んでいない。時々石橋、池田まで出かけるけれど、大っぴらでないか

ら気が引けるのだ。もっと休むことにしよう。私が疲れたと言ったらI子が「休んでください」と言い、行きかけて「年なんだし」とつけ加えた。私は「聞こえたよ。これから月二回休む」と宣言した。

○日　一日ゴキブリの気分

ゴキブリ用の薬をまきに来たので各部屋で立ち会わなければならない。しかし一部屋で降参、あとは廊下で待つ。人畜無害だというけれど、なにが無害なものか、目が痛くなり、頭が痛くなり、体がだるくなって、寝転びたい感じ。要するにゴキブリがひっくり返って虚空をつかんでいる心境がよく分かるのである。

夜になっても匂いが残りムカムカするので、食堂にいたS子達に「私、ひょっとしてゴキブリじゃないかしら」とふざけて気をまぎらした。

○日

今月二回目の休日。この前、月二回休むと宣言したからではないのだけれど、市民会館にオーケストラがやって来るので聴きに行くことにした。

きのう「あしたは目のくさるほど寝るから」と言ったら、みんな笑いころげた。目

のくさるほどという言葉を知らないみたい。しかし目がくさるどころか、いつも起きる時間にぱっちり目があいた。ゆうべは、早く起きなくていいから、と夜更かしをしたからなんのことはない、いつもより睡眠不足なのだ。コンサートで寝ることにしよう。と思ったが、市民会館の広くないホールは音があふれんばかり。久しぶりの生の音楽に酔いしれ、興奮さめやらず。

七　月

○日

私の休みの日、どういうわけかF子の休みとよくぶつかり、F子が寮当番をかって出てくれる。食事作り以外の、掃除、留守番をすれば会社から日当が出るシステム。私は出かける時「それじゃ寮母さん行ってきます」と言い、百パーセント〝おばさん〟を離れ、安心して行くことができるのだ。

しかし、帰ったらY子が「F子が鍵を持って歩いている姿はぴったりで、みんなで『そのまま寮母さんになったらいい』と言ってたの」とおかしそうに報告した。私も想像してそう言われれば、と笑っていたが、トンデモナイ、F子チャン、寮母になるのは二十年くらい後にしてね。私はこの仕事が気に入っていて、まだ譲る気はないのだから。

○日　洋裁教室繁昌

夜は誰かが私のところに来て縫い物をしている。ミシンは二階にあるのだし、手でするところは自室ですればよいものを「ここの方がすぐ教えてもらえるから」とか言って座りこむのだ。

それなら雑談しながらいろんなことを聞いてやれ、と思ったら、P子にもN子にも「おばさんはどうして寮母になったのですか」と聞かれてしまった。どうやら寮生達もこのチャンスに私の身上調査をやろうと思っているらしい。

○日

M子が「私、ふられたんです」と言う。「えーっ、ふられたって、いわゆる男にふられたのふられた？」「そうなんですよ。若い女にとられました」若い女にと言ったって、M子だって二十歳になっていない。「あなたのような可愛い人をふる男の気が知れんわねえ」「これから休みの日は寮のヌシになります。その前にいっぺんめちゃ飲みしよ。お酒をめちゃ飲んで、みんなに迷惑かけて……」「それはいいねえ、そうしなさい」

M子はきれいにカールされていた長い髪を切った。別人の如くボーイッシュになっ

てみんなを驚かせたが、少し憂いを含んだ、お化粧っ気のない顔は、言いようのないほど美しかった。

○日

ある事件が起こり、私が寮生をかばったために、その子の部内で寮母は何をやっとるんだという声が出た。当然そうなるだろうと覚悟の上のことなんだけれど、母親代わりではあるが、こちらも会社に雇われの身、どこまでやればよいのか、これはむつかしい問題。

幸い、その声が総務部まで届かなかったのか、K氏が無視したのか、お叱りは今のところまだない。

○日

O子とS子の名前が外出票にあるのに、顔を見かけた。「あれ、お出かけじゃなかったの」と言うと「あしたから沖縄へ行きます」と言う。うれしくて待ちきれず書いたらしい。

ここは土曜日も一日中働く代わり、何回もまとめて休みが取れる。もはや若狭、瀬

戸内、南紀へ幾組も泳ぎに出かけ、黒ン坊がいっぱい。冬はスキーで雪焼けしているし、どこへも行かずに焼けている私も目立たなくてよい。

O子とS子を「楽しんでいらっしゃい。おみやげはいらないよー」と送り出した。

○日

B子の佐賀県の実家からみなさんに、と西瓜が届いた。「西瓜パーティをします」マイクで呼んだらみんな下りて来た。その早いこと、寮会の時と比べものにならない。それに「パス」するという子がいるかと思ったけれど、全員ニコニコと集まった。

均等に切れないことがにぎやかさを増し、しかし恨みは残さず、皮と種を残して夏の夜のパーティは終りを告げた。

○日

屋上で洗濯をしていると、チャイムはもちろん、電話のベルも聞こえない。以前は回しておいて下りていた。ゆすぎにかえてまた下りて、と四十二の階段を三回往復していたが、最近は、横着さと体力の加減で、本を持って上がりしばらく屋上で過ごしている。

その間、ベルは鳴っていないよね、きっと。

○日

左手の親指にタコができている。はじめは箒のためかと思ったけれど、タコのできるほど掃除はしていない。気にしながら一日を過ごしてみたら、重いフライパンが原因と判った。片手では持ちにくいけれど、どうしても片手一本で持つことになるのだ。ペンダコならぬパンダコであった。右手にペンダコといえるほどのものはまだない。

○日

M子がお盆休みは後輩のY子に譲って一か月早く島根の実家へ帰った。ビキニの水着を買って日本海で泳ぐ、とうれしそうに出かけたのに、直後の豪雨禍。時間的にみて、家へは帰り着いているはずだけれど、全く連絡はとれない。大阪にいるおばさんから、浜田にいるおじいさんがM子の家へ向かってみたけれど、橋が落ち、道がなくて諦めて引き返したという情報が入る。

寮生はM子の安否を気遣い、毎日帰るなり「Mさんから電話ありましたか」と聞く。M子は血液型がRhマイナスで、けがでもすれば交通の途絶えた所では大変だろうと

いう心配もあった。

三日後、ようやく店に電話がかかり、元気でいることが判ったが、こちらからは相変らず通じない。

しかし、予定に一日遅れただけでM子は帰って来た。みんな大歓声で迎えに出る。M子は「山崩れを二回見た、生きた心地がしなかった、徒歩とタクシーとバスで、電車の動いている所までたどりついた」と話してくれた。

その夜の食事は作ってあったのだけれど、M子が「私の分もあるのですね」と確かめに来たので「ありますよ、お赤飯を炊きたい気分だけれどオムレツでかんにんしてちょうだい」と言ったら、M子特有のキャッキャッという笑い声が返って来た。

○日

N子が十一時を過ぎて帰ったので、当然分かっていると思い「日曜はお風呂洗いよ」と言えば、「えーどうしてですか」と言う。「どうしてですかって、寮の規則でそうなってるでしょ。いやなら早く帰りなさい」しかしN子は「たった四分過ぎただけなのに」とふくれている。「四分でも過ぎたらだめ、門限からは一時間以上ですよ」とこちらもむっとする。女の子だし、遅ければ尚のこと無事に帰るよう待っている私の気持ち

も察してもらいたい。やりとりを聞いていたH子が「N子、あきらめえな、楽あれば苦ありよ、遊んで来たんでしょ」

H子、I子、P子はお風呂洗いのベテラン。H子は門を開けに行くと「タダイマァ、○日にお風呂洗いまーす」と入って来る。I子のような「お風呂を洗いたいから遅く帰りました」という言い方もある。

○日

ここは虫の多い所。蚊、蠅、ゴキブリはいそうでいないのだけれどいろんな虫がいっぱいいる。蝉の声もやかましいくらい。夜は外でカナブンや、雀かと思うほどの蛾がばたばたと飛び、それをねらって大小のヤモリが首を動かしている。

ここ数日は毎夜クモ騒動。掌くらいの大グモが出没するのだ。外へ追い出しても昼の間にちゃんと戻っていて、あれも決まったテリトリーがあるのだろうか。I子とU子の部屋が好きらしい。I子は「もう一緒に暮らすわ」とあきらめた。「まあ豪傑ねえ、私はこわくていてられへんわ」と言っていたら私の部屋へもやって来た。I子の所のとは別もの。二回目に追い出す時「こんど来たら殺すからね」と言い渡した。

小さなクモは数知れず。調理場へ行っていて部屋を留守にし、帰ったらクモの糸に

引っかかったりする。大グモは「殺す」が聞こえたか、まだ戻って来ない。

○日

洗濯機を買う。屋上まで行くのがしんどいのと、手拭き、食器拭き、台拭きなどの洗濯を機械にまかせて手の荒れを防ごうという魂胆。応対をした店員が珍しく感じがよかったので冷蔵庫もついでに買った。（こんな買い方する人あるかしら）これで食材を入れる冷蔵庫を半ば私有化していたのも解消。

今までのキャンプ生活みたいなのから脱して、私の部屋もだんだん人の住めるような形になってきた。しかしクーラーはないから、今日は部屋の中で三十三度もあった。職権濫用してボイラーに火を入れ、シャワーにかかって一息つく。

八　月

○日　お盆休み

寮生のほとんどは郷里へ帰ってしまった。残っているのは、先月帰ったM子と、沖縄へ行って来たO子とS子、九月に姉の結婚式に帰るからというE子の四人。

おみやげを先に宅配便で送り、バッグ一つで行く子や、両手一杯の荷物でどうしようと言っている子などさまざまで、しかしみんなうれしそうに出て行った。

「だれかー、私を連れて帰ってくれる人いないのー、みんな私を捨てて出て行くのねー」といやがらせをやっていたら、I子が「おばさんも休みをとっていなかへ帰ったら」と言った。しかし私には帰る所はなかったのだ。仕方ない、私は寮でおとなしく留守番しているから、みんな、思う存分うちの人に甘えておいで。

○日

みんないなくて私一人。昼間はいつもこうなんだけれど、夜になっても帰って来ないのだと思ったらなんか淋しい。残っている子達に早く帰ってねと言っておいたら、ちゃんと早く帰って来てくれた。あした私が出かけるから鍵を持ってくれる人は誰か、と相談するのは家族会議の感じ。いつもは尋ね歩いてさがすのだけれど、あっさり決まってしまった。

夕食作りは四人分だと普通の家庭と同じ、お風呂はなしで、シャワー用のお湯を沸かすだけ。掃除もさぼり、私も久しぶりの骨休め。

○日

ふるさとの空気を一杯吸って、戻ったなまりもそのままに、みんな続々と帰って来た。しかし一様に台風の影響で遊べなかったと不服そう。

台風さんよ、折角の貴重な休みの時に来ないでやってくれませんか。

○日　日曜日

朝、K子が、薬と体温計と氷枕を、と言って来た。T子が発熱していた。とりあえず風邪薬をのませたけれど熱は上がり続け、昼頃タクシーで休日急患診療所に連れて

行く。

咽頭炎との診断で薬をもらい一安心、と思ったが、夜になっても熱は下がらず、下痢がはじまって、もう手に負えなくなり、救急車を呼んだ。救急隊員にどこへ行くのか聞いても分からないとのことであったが、幸い近くの市民病院と決まり、入院した。

落ち着くまでは付き添い、夜中の道を一人帰る。

勤労青少年指導者大学の講座生が、企業研修に来て、今日から四十日間、二寮で預かることになった。

○日　寮会

きのう、研修生が到着するなり、T子の入院騒ぎで紹介もできず、今夜あらためて歓迎会をする。

二人とも大学を出ていて二十二歳、やはりさすが、と思わせる。が一人は〝芸人〟とのことで、いずれみんなを遊ばせてくれるそうな。この二寮も、もひとつにぎやかになりそうだ。

○日

五月山の大文字の火と、猪名川のほとりから打ち上げられる花火を屋上から眺めた。夜は涼しい風が吹いて、はげしかったこの夏もようやく衰えを見せ始めた。今日は処暑。

九月

○日

久しぶりの雨。雷公をお供に景気よく落ちて来た。M子が「毎年今日は雨が降るんです」と言う。どうして分かるのかと思ったら誕生日だからとのこと。「とうとう、二十歳になってしもうた」「しもうたということないでしょ、成人おめでとう」やがてO子と梅田へ祝杯をあげに出て行った。他の寮生達も後から合流する由。

雨は、止んで照ったかと思えばまた降り、かなりの降水量であった。

夜になって、H子、A子、B子から「バレーの試合で優勝したから飲んでます。遅くなります」と連絡が入る。まわりにいたF子達に「バレー部が優勝したそうよ」と知らせると「ウッソー」「シンジラレン」。私は「そんなこと言うたら怒られるよ」とたしなめていたのだけれど、遅くに帰ったH子達の顔を見て「雨を降らしたのは君達か」と言ってしまい「ワーヒドイ」「先輩におばさんがそう言うたと言うてやろ」と、

恨まれた。

○日

T子が退院した。二、三日で治るだろうと思ったのに、はかばかしくなくて十日もかかってしまった。それも、まだ早過ぎるというのを無理やり帰って来た。老い(私)はもちろん、若きもこの暑さで参っている。

T子の入院中、寮生に見舞いの手紙や縫いぐるみをことづかって届けた。「縫いぐるみは恥ずかしいなあ」とT子は言ったけれど「折角だから」と置いてきたら、次に行った時は抱いて眠っていた。可愛らしかった。

病人用にスープを炊いておいたら、K子が味見をして「おいしい！　私おばさんの味好きです」と言うのでうれしくなって「特別よ」とカップに分けた。

○日

秋刀魚を焼こうと袋を開けたらサンマ、サンマ、サンマ、サンマ。おかしいよ。若いモンは魚を敬遠し、希望者は少ないはず。確かめに行った。九人で二ひきずつ十八ひきあればよかった。四十ぴきもあるので返さなければいけないかと給食センターに

電話する。「間違ってすみません、処分してください」処分してと言ったって……きれいなおいしそうな秋刀魚、捨てられぬ。誰か食べてくれる人いないかな。Rさん（市内に住む三十年来の友人）に聞いてみよう。「助けてよ」「どうしたの」「秋刀魚いらん？」「いる」「二十ぴきもあるのよ」「……とにかく行くわ」助かった。

給食センターでは早朝からパートさんが材料の箱詰めをしているとのことだけれど、ちょくちょく間違いがある。多いばかりではなく、少ない時もある。いつか、焼売六個ずつ十一人分のところ五十個しか入っていない時があった。その時は五個ずつ十人に分けて、私の分はなし。私は作り手として必ず食べることにしているからまわすことができるけれど、まわせない時はどうするのか。給食センターに文句を言ったら「すみませんでした。その代わり卵で入れておきます」と後日卵が六個届いた。これを、焼売が一個足りない十人と、六個足りない私とでドウワケリャイイノサ。多いのも困るし、少ないのはもっと困る。

○日

I子を相手に碁を打つ。I子のお父さんは自称二段とかで、少しは見て知っているらしいけれど、初めからやってと言うから、私も早く碁敵をこしらえたいので性急に

いろんなことをつめこんだ。夜になって「寮母さーん、私、熱があるの」と言ってきた。「どこもしんどいとこないからこれは知恵熱よね、きっと」

甚のために熱が出ては申しわけないから「もうやめとく？」と言えば、「いいえ、面白いからやりたい」とたのもしい言葉が返って来て、週に二時間ずつすることになった。彼女はきっと私より強くなるだろう。

○日

この頃イカの料理がよくある。私はイカは食べられないので、今まで丸のままのイカを調理したことはなかった。おなかの中はイカなることに（！）なっているのかおそるおそる開いてみたら、まあ魚と似たようなものであった。

子供の頃からイカを食べると胃痙攣ようの痛みが起こり二時間ほど七転八倒しなければならない（もっともイカが原因と判るまでに十年くらいかかった）。タコも同様。イカ、タコにあるタウリンという成分がそうさせるとのことだけれど、それで腰が抜ける人もあって、かなり強力なものらしい。タウリンはコレステロールを溶かす性質があるので、きらいならともかく、好きなのに食べられないのは残念なことである。

○日

涼しくなりかけて一息ついたところで気がゆるんだか、とうとうへばってしまった。鬼の霍乱。丈夫が取り柄の私なのになさけない。歯にもきて顔半分腫れ上がった。鼻が空向いて面白い顔。もう美人になりたいなんて思わない。元の顔でいいから戻りますように。

ここは二日前に食数を知らせてあるし、前日に食材が来ているから、急に休むわけにはいかない。掃除はさぼって、食事だけを休み休み作る。ほとんど寝て暮らす。

寝ながら読む本をと、寮生にマンガを貸してもらった。たいてい可愛らしい恋物語だけれど、読み出したらやめられなくなって、続きや、前の号に戻ったりして、こちらの方にも病みついた。早く次の号が出ないかなあ、と待ち遠しい。

○日

夜、バレーボールをする組と、ジョギングをする組が玄関でわいわい言っていた。バレーボールは隣の公園へ、ジョギングは寮の周りとのこと。

「あんまりキャアキャア言わずにやりなさいよ。走る人はかたまってね」「おばさんもバレーボールやりません？」「私ね、バレーボールは苦手なのよ。ジョギングの方へ、

もちょっと元気になったら参加させてもらうわ」「わー、やろうね、やろうね」

みんな背が高く、ウェアはおてのものであるから、スポーツ選手の集団という感じ。立っているだけですごい迫力がある。これなら痴漢もおそれをなして近寄らないだろう。

十五分ほどしてジョギング組が帰り「疲れたァ」とオーバーにロビーでひっくり返る。「えーっ、もう帰って来たの。まだ十五分しかたってないよ」「でもー、長いこと走ってへんかったからー、しんどいよー」「汗かいたー、おばさーん、お風呂入れるー」もう、あんたら見かけ倒しなんだから。ウェアが泣くよ。「しようがないわねえ、まだ少し早いけど入っていいわ」「わー、サンキュー」

こんな調子で、私が参加できるまで続いているのかな、三日坊主、いやあしたはすでにだめかも知れない。

○日　研修生による寮母受難（？）の記

長いと思われた四十日もあっけなく過ぎて、勤労青少年指導者大学の研修生が帰る日が近づいた。「お別れの寮会をやってくださいますね」と本人達からも言ってきて、ひと晩たっぷり時間をとって歓送会をした。

ジュースで、ありがとう、お元気で、また会いましょうの乾杯をし、感想やら、はなむけのスピーチがあって、いよいよメインの遊びが始まる。

女ばかり二十二人のキャアキャアワイワイで、食堂は割れそう。お隣さん、かんにんしてください。

研修生は、なれたもので、次々とゲームを進める。二人一組で、相棒の名を呼ばれた時に返事をし、次の指名は本人がする、というゲームで、私はP子と組んだ。練習がすみ、本番となったしょっぱなに「Pさん」……Pさんということは私が返事か……「ハイ」

ところが判定は「遅い！」みんなも薄情に「アウト！」「だめな人は抜けて」

テキは、私が年をとっているから反応は遅い、とみたか。しかし確かに返事は遅かった。ガックリ。その時友人から救いの電話がかかり、中座した。

I子が呼びに来て戻り、みんなで肩を組んでゆれながら歌うのに加わる。これは、歌が一小節終ればトタンに阿波踊りのような格好で踊り、すぐさま元に戻って歌うというのである。私の踊り方が足らんと言われ、これもやけくそでやっていたが、歌が三小節終り、踊りもこれで終りかと踊ったら、他の誰も踊らない。私はみんなの輪の中で一人手を振っていた。

どうやら電話中に、私をおとしいれる相談ができていたらしい。みんなニコニコ。「こらあ。年寄りばっかりいじめてえ。末が思いやられるなあ。嫁さんになっても姑をいじめたらいかんよお」私はくやしまぎれにわめきちらした。

二人の研修生は、教員と福祉の仕事に就く予定で、寮生活は初めてで楽しかった由。初めにお客扱いはしないと言ってあったので、トイレ掃除も寮当番もやっていた。

寮生は入れ替わり彼女達の部屋を訪ねていたから、別世界の見聞を広げたに違いない。私も違う雰囲気があって楽しかった。最後にカモにされたけど、まあいいわ。

またきっと遊びに来ると約束して、彼女達は帰って行った。別れを惜しんだS子は、送って行く、と一緒に出かけ、大阪駅まで行ってしまったとのことであった。

十月

○日

ここにいると、いろんな生き物に出会うけれど、最近また出てくるな、という予感があり、次はなんやろと思っていたら、ロビーの天井に黒いもの。クモにしては足がないし、複雑な形をしている。そろっと見に行ったら蝙蝠であった。ぶら下がらず、へばりついているから蝙蝠という感じはない。

寮生の反応が面白かった。「きゃあこわい」「ひょっとしてコウモリ？」「やあ可愛い」「コウモリてこんな顔か」「子供の頃よく遊んだわ、体は冷たいよ」「おしっこはどうやってするか知ってる？　飛ぶ瞬間にするのよ」「血ィ吸うの？」「それはマンガでしょ」「なんでこんなとこにいるの」「おばさん飼うの？」「自閉症と違うか、群から離れてじっとして」「ここで冬眠する気やないやろね」「ばたっと落ちたら死んでたなんて」「やめてよ」

結局、二日間へばりつき（夜だけ糞を落とし）三日目、明かりの消えたロビーの中をしばらく飛び回っていたが、開けてやったドアから夜の空へ出て行った。
何を考えていたのか知らないけれど、どういうつもりかと気になる存在であった。

○日

今日はお風呂は休み、やっぱり気も体も楽でほっとする。お風呂のある日は、七時半から焚き始め、お湯と水を出して、湯加減をみながら九時までに入れ終り、入浴を始めてからは、ボイラーの温度計と、あと何人かをみて消す時間を決める。お湯の使い方もご飯の残り具合と同じで、その日によって異なる。ガスの節約はした方がいいし、早過ぎたら、私の入る時にはお湯は出ない、ということになるのでむつかしいところ。

十月から週一回休みになり、今日で二回目。誰か忘れて入りに来る子はいないかと思っていたら、果たしてF子が洗面器とタオルを持ってやって来た。「ごめんね、今夜はなしよ」「あ、忘れてた。でも、廊下でSさん達に会ったのに、何も言うてくれんと笑ってた。くやしい」

○日

大雨。朝「出かける人は大変ねえ、着替えを持っていらっしゃいね」などと言っていたのだけれど、そのうち、食堂に池ができ、下水はあふれ、配電盤の中を水が流れ出した。配電盤の方は技師がとんできて直ったが、食堂の水はモップで拭き取る、という消極的な方法しかなかった。休みのY子に手伝ってもらったけれど、雨の間中水との戦いであった。もうクタクタ。

○日

寮生達の部屋着は、ほとんどトレーニング用のシャツとパンツ（ズボン）である。ただし若いのに（若いからか）赤い色は少ない。寒くなって、私も長袖トレーナーを着たら「わあ、トレーナー着てはる」と何人かが言った。「なんでえ、私がトレーナー着たらおかしい？」「いえいえ、若々しくていいです」「そうお？　なんかもっと言いたそうやったよ」

虹色のスリッパを履いたら、「やあ、おばさん、ブリっ子」「あのねえ、スリッパくらい可愛らしいの履かせてよ、私のシュミは幼稚なんだから」

でも、わあトレーナーと言われたのだって、白で胸に黒い線が一本入っているだけ

のさみしい物。私のシュミではない。よーし、これからやあだのわあなんかにひるまず、派手なものを着ることにする。I子に、「トレーナー買って来てちょうだい。紫や緑や黄土はだめよ、赤かピンク」と頼んだ。「みんな赤いのは着ないから、これでバランスがとれるでしょ」

○日

I子が栗拾いに行き、茹でてください、と、ドサッと栗を持ちこんだ。四キロあった。大きなざるに一杯の栗がどうなることかと思っていたけれど、二、三時間のうちにあっさりとなくなった。

夜、小さな栗が一つ残っているざるを見た時、ピラニアに喰われた魚の、骨だけになった姿を連想してしまった。二十人というのはやはり、すごい。

○日

Rさんの所へ遊びに行った。留守にしてはいけないのだけれど、内緒。Rさんは昔のコーラスの友人なのに、しゃべってばかりで歌わないから、いっぺん歌おうよということになった。予定はエレクトーンを弾いて歌う、だったけれどエレクトーンはむ

つかしかった。低音がないと言ったら、足で踏むのと言われたけれど、頭がこんがらがってモタモタし、とても伴奏にはならない。

Rさんと私との距離は、直線距離で三・五キロであるが、Rさんが寮へ来る時は二十五分かかり、私がRさんの所へ行くのは二十分足らず。

なんでこうなるかというと、自転車でRさんはおとなしく走り、私はぶっ飛ばすから。私だけについて言うと、往きは早く、帰りは遅い。往きは早く着きたいし、帰りは後ろ髪を引かれる分遅いというわけだ。

内緒だし、思うように歌えなかったけれど、久しぶりに大声出して、モヤモヤは解消した。

○日

栗ご飯。一寮さんから、栗をむくのが大変だから、寮生に手伝ってもらいなさい、むくのはいやと言ったら、別メニューにすればよいとのアドバイス。それで一寮は卵料理に変えたとか。うちは「むくから栗ご飯炊いてほしい」と言う子がほとんど。「そうよねえ、旬のもの食べないと。それに同じようなメニューで飽きるものね」

大きな栗が百個ほどあり、前の晩に鬼皮は私が、渋皮を寮生にむいてもらうことに

する。一人五個。私は、次々と帰って来る子達と一緒にむきながら、おしゃべりと、それぞれの手つきを眺めて楽しんだ。

N子、J子が思いの外上手にむくのでほめると、J子が「おばさんとカツラむきの競争をしてもよい」とのこと。お母さんが食堂をしているから、いつも手伝っていた由。「いやあ、もう先に降参するわ。多分負ける」

それに比べ、H子、D子の危なっかしい手つき。ハラハラし過ぎて神経に悪いので「たのむからもうやめて」とノルマを返上してもらった。でも「包丁が使えなくてどうするの。リンゴで練習しなさいよ」と言っておいた。包丁の持ち方も教えないで、娘を社会に出す母親の気が知れぬ。その他E子とT子がすっぽかした。

翌日、自分でむいた栗の入っているご飯は特においしかったのか、いつもの倍ほどの量のご飯は、一粒残らず食べ尽くされた。

○日

三十五日ぶりの休日。何はともあれ電車に乗らなければならぬ。友人と京都に行った。

電車に乗る、動く風景を見る、石畳を歩く、木々に囲まれる、これら何の変哲もな

い事柄がうれしくて、やはり何かに不自由するということは、物の有難さが分かってよいのかも知れぬ。それと共に、一つの望みが叶うことと引き換えに、また別の何らかの辛抱はあるということか、などと考えた。

楽あれば苦あり。なるほど、私の待望の外出日に天は味方せず、雨が降り出した。おまけに、履きなれた靴で出たのにマメができてしまった。毎日スリッパやつっかけばかり履いているから、足が伸び伸びとくつろいでいたらしい。しかし目的は達成したので早々に寮へ帰る。

十一月

○日

夜、隣の庭に入りこみ、有刺鉄線の向こうからのぞいている男二人を見つけた。「何かご用ですか」と声をかけたら、自転車に乗って逃げて行った。中学生か、高校生のようであった。のぞいたところで何も見えはしないのに。しかし、こんなのはまだしも、この間は一寮の子が後ろから抱きつかれ、腕をかんでこと無きを得たが、警官が来て気をつけてくださいと言うけれど、私としてはどうしようもなくて困ってしまう。

この頃は早くに暗くなる。

○日

東京に帰った研修生から手紙が届いた。四十日間の研修で、寮生活を抜いては何も語れない、とあった。

職場でいろんな事を学んだが、特に寮生の高卒で働いている人と話したことで、改めて大学まで行けた自分の恵まれている環境を実感し、大学生、大卒者にない強さを見た。高校の教員になる自分にとって、何よりの貴重なものを得られてありがたかった、と書いていた。

その他、帰って他の企業に研修に行った仲間達と話し合った結果の、寮の在り方や、アドバイスがこまごまと書いてあった。

私にも外部から見た感想はありがたかった。

○日

新聞の酢の広告に出ていたサワー漬けというのをやってみた。大根、人参、胡瓜を棒に切って、酢、塩、砂糖、花鰹、レモンで漬ける。いつも自分でお漬け物を作っているO子に、残った材料と広告を渡した。後でそれぞれのを試食する。同じように作っても味が違っていて、他の寮生達にも分けてにぎやかであった。

いつか寮に泊まった高知工場の人から、柚子をたくさん送ってもらったので、レモンの代わりに柚子を入れ、鰹を抜いてやってみたら、これが一番いいということになった。

ここしばらくサワー漬けに凝っているという次第。

○日

編み物が大流行り。洋服縫うのは熱が冷めて、今は専ら編むことである。この方は、寮生達はお手のものだ。高校時代にボーイフレンドとお揃いでセーターを編んだ、というのが何人もいる。アラン模様の複雑なのも楽々とこなす。私も編みたくなって、毛糸をたくさん買った。でもその前にやってしまわなければならない縫い物があるので、今は眺めているだけである。早く編みたい。

○日

休みのA子が「今日は一日中、寮にいて留守番するから、おばさん出かけてもいいですよ」と言ってくれたので、お言葉に甘えて、塚口の叔母の所へ、自転車で行くことにする。

前から、いかにして遠回りせず、自動車の少ない道を行くか、と少しずつ開拓していたのだけれど、猪名川を渡るのには、どうしても一か所大きな道を使わなくてはならない。自動車で走っていた時は、橋なんか何とも思わずに渡っていたのに、それと、

自動車にとって、自転車が横を走っているのはすごく神経を使うものだから、排気ガスもいやだけれど、なるべく自動車の邪魔になりたくないのである。

空港横の、飛行機が頭上すれすれに飛ぶ道は鶏が遊んでいた。見物人もいたけれど、飛行機が離陸に失敗すればお陀仏、というところ。

地図を見ていながら、左へ曲がる所を右へ曲がって、大分損をし、一時間後に着いた。走行距離は十キロ。帰りは途中まで別の道を従弟に伴走してもらって八キロ。四十分足らずであった。

久しぶりに会った叔母は「もっと居(お)りなさい」と言ったが、寮が気になるので、後ろ髪引かれながら帰って来た。道が判ったから、また行きますよ。

○日

門限破りが多いし、罰つきの深夜帰りも多い。果たして門限を破らないのはいるかと、私が来てからのノートを調べてみた。このノートは各自サインと帰った時間を書くもので、十時を過ぎると赤ペンで書く。

結果は一人もいなかった。ようやるなあ。

P子はもうお風呂洗いが三回たまっている。十一時を一分でも過ぎたら罰がつくの

だけれど、少し不公平な感じがしないでもない。十一時すれすれに何度も帰って来るC子は、要領がよいと言えばそれまでだけれど、お風呂洗うのいややから、十一時過ぎそうだったらよそに泊まる、というのもかなりいる。

泊めてもらう所がなくて寮に帰って来るP子。「ごめんなさい」と何回も謝って、赤ペンでサインしているのを見ると、一回くらい罰を減らしてやろうという気にさえなるのだ。「早く帰れ」と怒っていたのなんか棚にあげて。

○日

I子とU子が、東京ディズニーランドへと、寮内のいいなあの声の渦巻く中を抜けて行った。私の、例によって「私も行きたーい」とわめくのは同じ。

二人はちゃっかりと、前に来た研修生の所に泊めてもらう手筈を整え、迎えにも来てもらうのだとのこと。I子がそっと言いに来た。「おばさん、U子と行く私の苦労、察してちょうだい。あの子のおもりは大変なんだから」U子は体の調子の良否の差があり過ぎるのだ。「元気?」と聞いたら「元気、元気」と指でVサインなど送って来るかと思えば、急に「歩けない」と顔色なんか全くない時がある。「ほんとに。あんまりムリをしないでね」

そのU子のバッグの方が大きくて、「あなた、自分の体力を考えた？」と言ってみたが、これ以上小さくはならないという返事。I子は最悪の場合を考えて、自分のバッグは小さくしたとのことであった。ご苦労様。

しかし三日後、二人は元気に帰って来た。おみやげにミッキーマウスの壁掛けをもらい、写真など見せてもらって、ほんとに「私もディズニーランドに行きたーい」。

○日

もうみんな、お正月のプランを楽しそうに話している。帰るために、一か月前に切符を買わないといけないからだ。

私のお正月はどうなるのか、寮生次第。事務関係は休みに決まっているけれど、年中無休の店もあるので、店に勤めている子は、お正月も残る可能性があるのだ。「あなたのお休みはいつ」と聞いてまわった。

結局、お正月には仕事をする子はいなかったのだけれど、O子が暮の切符が取れなくて、元日の朝に帰るとのこと。「おばさん、二人で年越しそば食べましょ」それはいいけどね。O子が帰ってしまったら、私は一人。

まあ行く所もないから同じことか。普段は何とも思わず暮らしているけれど、盆と

正月、というのが困る。

十二月

○日

P子が足音高く帰って来て、「おばさん、私に電話がかかってきても、いない、と言ってちょうだい」と、すごい勢いだった。たまたまロビーにいたI子と私はただ、呆然。

しかし、私は夜の電話番はしないので、帰寮のサインがしてあれば、他の寮生はP子がいると言うし、取り次ぐだろう。「黒板に書いておきなさい」と言ったけれど、P子は書きかけて消し、怒ったまま行ってしまった。仕方がないから私が「P子石橋へ」と書いておいた。こうすれば、一度帰ったけれど石橋まで出て、いないことになる。

しばらくしてY子がお風呂から上がってきて、「Pさんがありがとう、もういい、って」と言いに来た。P子はどうやらボーイフレンドに待ちぼうけをくわされたらしかった。でもお風呂に入っている間に神経が静まって、怒りもおさまったのだろう。

やがてP子は、かかって来た電話に出て、長い間話していた。

○日

E子が来年早く退寮するとのこと。鹿児島に帰って、花嫁修業をするらしい。E子は寮内きってのトラブル・メーカーであった。

それに喜怒哀楽の表わし方が激しく、喜楽の方はいいとして、怒哀の時はすさまじい。受話器をつかんで泣き叫んでいるのはしょっちゅうだし、機嫌が悪けりゃ誰にでもニコリともせず、見向きもしない。ややこしい事件もあった。

「そう、それは残念ね」内心ほっとしながら、私は届けにハンコを押した。しかし、E子は自分をよく知っていた。「残念なことはないでしょう」私はちょっとうろたえた。が、がんばった。「どうしてよ、残念ですよ。あなたがいなくなったら淋しすぎるわ」

○日

食堂へ入って行った時、N子が「おばさん、Iさんが変なんですよう」と訴えた。I子が飛び跳ねている。「どうしたの？」と聞いてみたが、返事はなくて、紙をひらひらさせながらニコニコするばかり。悪いことではなさそうなのでそのまま引きあげた。

後で「東京の研修で知り合った、九州の実家近くの男性から、お正月休みに阿蘇を案内する、という手紙が来たからラッキーなのだ」と言いに来て「うれしいな、うれしいな」と歌うように出て行った。無邪気そのもの。

○日

本社のK氏がボーナスを持って来て下さった。あの人も、沢山持って来るのなら大威張りで来られるだろうに、お気の毒、などと変な所で同情する。でもいくらであろうと、有難く頂戴しなくては。給料もらって、ボーナスまでもらえるなんて。こんな恵まれたことはないのだから。

しかし、その代わり、のおまけがついていた。一寮を改築のため、その間十四人の寮生を預かることになったのだ。まあ、寮生の多いのはそう大したことはないが、寮母さんも引っ越して来るのはやばい。それで恐る恐る聞いてみたら、「いや、工事の人が出入りするからいてもらいますが、料理しにだけこちらへ来られます。二人でやってください」と言われた。

正直言って、これは厄介なことになったもんだ。

○日

ここしばらく、お風呂の空くのが十一時をかなり過ぎてから、というのが続いている。十時半からは入れない規則を守らないのがいるらしい。

思いついて「みなさん、お風呂へお入りになりましたか。ただ今十時半でございます」と放送してみたら、その日は十一時前には全員済んで、私の仕事が済まないのでまだ私は入れないという皮肉な結果となった。

しかし、忘年会でみんな帰るのが遅くなる日が多い。どうやら今日も団体で遅くなりそうなので、お湯を入れながら一番に入る。寮生は一緒に入ったらいい、と言うけれど、私は「一人がいいのです」と、まだがんばっている。

○日

A子が発熱して欠勤。風邪薬をのんで寝ていたら熱は下がった、と言っていたのに、夜になってから再び四十度近くに上がって苦しんでいた。昼間、無理にでも病院へ連れて行けばよかった。

救急車で、川西市の病院に入院したが、肋膜にカゲがあるとのことで、しばらくかかりそう。

もう歩けないと言うから救急車を頼んだが、救急車が来た時に寮生に支えられながらも自分で下りて来たので、救急隊員に「歩けるのだったら、自分でタクシーで行ってください」と繰り返し叱られた。昼間病院へ連れて行っとけばよかった、の後悔と共に、そう言われたのがいつまでも心に残る。

○日

枚方市樟葉公民館で催された、クリスマス・キャロルを歌う集い、というのにRさんと出かけた。他のコーラスOB達も一緒。

コーラスをやっていた時は、クリスマス・イヴになると、にわかクリスチャンとなり、賛美歌を歌いまくっていたもんだ。今はとにかく何でもいいから歌いたい。

会場はツリーにあかりが灯り、窓ガラスに雪の結晶がはりついていた。少し風邪気味だけれど、どうせ声は出ないから同じことで、それでも楽しんで歌ってきた。

帰り、十数人でお茶を飲み、そろって京阪電車に乗ったのに、電車が止まる度に少しずつ下りて、地下鉄、阪急を乗り換えて行くのは私とRさんの二人となる。

宝塚行きの最終電車は、ほろ酔い機嫌の人達で一杯。私達も久しぶりに思い切り歌い、旧友に会った満足感に酔って、よかったね、と何べんも言い合った。

外は粉雪が舞っていた。

一月

一日

お正月。一人残っていたO子が、早朝の便で帰ってしまったら、三日間私一人。

Rさんが来て「泊まってあげる」「えっ、お正月早々そんなことして、追い出されても知らんよ」彼女は「いいのよ」とけろっとしている。

友の身を案じて来てくれた厚意は、涙の出るほど有難いけれど、どうか家庭争議が起こりませんように。

結局、Rさんは可愛らしい顔してさっさと眠り、独り寝に慣れた私は寝つかれず、Rさんの寝息を数える羽目となった。今年はどうやら波乱含み。

○日

雪。大阪の積雪量は明治以来とか。ここは二十センチ。夜明けの、十センチくらい

の時に、D子と小さい雪ダルマを作る。まだどんどん降っていたから、止んでから大きいのを作ろうと思っていたのに、途中から雨が混じりべとべとになってしまった。

玄関から門まで、少しでも歩きやすいようにと、スコップを持ち出して雪かきをした。初体験であった。

出かける子の靴の裏を点検、それはよし、それは滑る、ギザギザの入ったのを履きなさい、とお節介をやいていたが、帰って来て、「スノトレ（スキーに行く時に履く靴）履いて行ってよかった、ハイヒールの人は滑ってころんでいたもんね」と言う子がいた。おばさんの言うことも聞くもんでしょ。

○日

N子がスキーに挑戦する。何事もワンテンポ遅れ、超スローの彼女。「大雪やもんね」「あれえ、雪が降るからスキーをするのですよ」「そうでしたね、失礼致しました」

I子達が「はじめは買わなくていいのよ」と道具を貸して、いろいろとアドバイス。行ってからも「どうしてるかなあ」さっさとやりこなせないのが分かっていてもやはり気になるのだ。私も早く、どうだった？と聞きたいのに、N子の乗ったバスは、雪のために動かず、帰れない。

○日

今年初めての休日。またコーラスＯＢの懇親会にＲさんと出かけた。コーラスをやめて三十年。よくもまあ長いこと引きずっているものよと思うけれど、心身の成長期を過ごしたところは捨てがたい。しゃべって、食べて、歌って、二次会へ。

二次会場は、ＯＢでただ一人故人となったＭ氏宅で、未亡人も仲間だから、以前と同じように毎年押しかけるのだ。Ｍ氏のテノールはまだ耳に残っている。写真が笑っていた。ここでは私は台所の係。Ｏ氏が、休みの日くらい台所から離れたらいいのに、と言うけれど、どこへ行っても何となくこういうことになる。そういう運命らしい。

ところでこの帰り道、痴漢に遭った。正しくは痴漢らしい人に遭っただけ。この人、何かするか言うつもりを、私の顔を見て断念し、さっと行く手を開いたのだった。ヤメンカテエエヤンカと一瞬気が悪かった。しかし、この若者の心情を察し、気の毒でおかしくなり、あと半分の道のりを笑いながら帰る。残念ヤッタネエ。

○日

一、二寮共に改装工事をすることになり、ここは外に足場を組んでの工事で住人の

移動はなし。しかし、ものすごい音。体中音だらけ。何も考えることができない。休みの子達は「耐えられん」と梅田あたりへ遊びに行ってしまった。

「出て行ける人はいいなあ」と見送ったら、S子が戻って来て、「お大事に」と言ってくれた。

○日

一寮生受け入れ打ち合わせのため、一寮へ行った。寮母のHさんがドアを開けるなり「マジョ～」と言う。私はフードつきロングコートを着ていたから魔女か。「やあひどいなあ」と言ったら「私がよ」

見ればキルティングのロングスカートに綿入れ半纏を着ていて、マジョと言うよりはもっと別の感じ。

しかし、Hさんを笑うことはできない。私の炊事場での服装は、スカートの下にジャージ（トレパン）をはいている。F子に「それ、何とかなりませんか」と言われたが「なりませんねえ」と言っている。

○日

一寮生が十人引っ越して来た。やはり仕事は多くなり、早起き、遅寝が加わる。早起きは、始業時間の早い子がいるからで、遅寝は、お風呂の終る時間がどうしてもずれこむから。ただ今二十八人。

○日

Hさんと共同の炊事始まる。彼女は変った人で、おいしいものを作る必要はない、という主義。そのためか、私のすることを一々牽制する。

厚揚げ、飛龍頭を、うす味で炊くと言い張り、私は諦めて譲った。まあ、うちの子達に食べさせるのもいいことかも知れぬ。少々かわいそうな気もするけれど。私はお醤油をかけて食べた。

〝ひろうすひろうすひろうすにしょうゆをかけてくらうはわがふるさとのならいなり〟慰めにふざけてみたが、食事の楽しみがなくなった。ここで気がついた。私は寮生のために、おいしいものを作ろうと思ってやっている、と思っていたが、自分も食べるからであった。彼女は食べない。

寮の食堂にて仕事着姿の著者（中央、1983年）

ピンクハウス柄の生地をワンピースに仕立てた（1984年。→p.110参照）